

## 1. 研究目的

まず日本の暦には春夏秋冬を 24 の季節に分けた二十四節気というものがある。古くから季節は大切に扱われており季節ごとの祭りや俳句の中の季語、和食には季節の食材などいろいろな「日本伝統」とリンクしている。

しかし、時間に追われる現代人は時間を気にするあまり日本の四季から無意識に遠ざかっているのではないかと感じた。そんな現代にゆっくりとした時間の流れと季節感を取り戻そうと考えた。

## 2. 調査と分析

二十四節気とは全体を春夏秋冬の4つの季節に分け、さらにそれぞれを6つに分けて、節気と中気を交互に配したものである。同世代の二十四節気についての意識を図るために実際に 30 人程度の学生にアンケートをとった結果、25 人が二十四節気存在を認知していなかった。

本来日本人は日の出とともに起き日が沈むと寝る、そして 24 節季を利用し種まきや収穫をし、季節と暮らしは密接な関係にあった。また日常生活において暗がりの中に美を見出し、日本座敷などは陰影の濃淡によって空間を演出しておりなんでもないと美の意識を感じていたことが分かった。

## 3. コンセプトの立案

「季節と生活を密接にする」

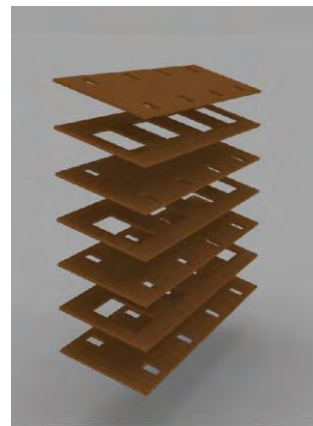
- ① 季節をより身近なものにするためのもの。
- ② 日本人の美意識と影によるパターンの違い。

## 4. デザイン展開

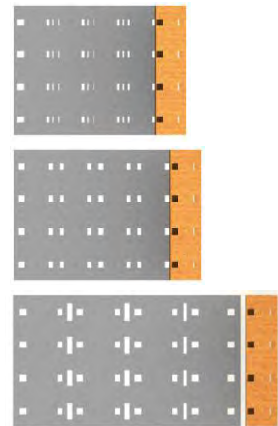
- ① ルーバー形状に細工を施したものを室内の窓際に設置する。(図1)  
人工光ではなく自然光を使い息の詰まるような社会から室内では一年というゆっくりした時間に変えゆっくりと変わっていく影、濃度の違う影を使い日常と違う時間を作り出す。
- ② 二十四節気の南中時刻の影を使って季節をパターン化した。(図2) (場所は東京を基準とした) 太陽の日照角度の違いにより細工を施した穴から差し込む光を制限する。穴自体に厚みを持たせ季節ごとの角度を持たせるのではなく、穴と穴の位置関係をパターン化し自然光の角度の違いを最大限利用した。ただやみく

もに穴をあけるだけでは何も結果を得られなかったので季節ごとの入射角をいくつも重ね光のおれる場所、通れない場所を明確にし、影の違いを出した。

## 5. 完成図



▲ 図1 ルーバー形状の原理



▲ 図2 影のパターン  
上から秋分/春分/雨水

## 6. 結論

24 つの影の形をすべて差別化することは難しかったが今回は微妙な影の違いに対応できるように床に印をつけて差別化することにした。この差別化は今後に解決すべき課題として残った。

30 人程度の学生アンケートの実に 27 人が「季節を視覚化できたら面白いと思う」と回答を得られた。数人にこの完成図を見てもらい感想を聞いてみた。結果、皆研究内容に興味を持ってもらえていることはわかった。次にこれにより季節に興味を持てるか聞いたところ「物自体がわかりにくい」「微妙」「日差しが弱い時はどうなの」と厳しい指摘もありまだまだ未熟なものだと思ひ知らされた。

## 文献

谷崎潤一郎 ”陰翳礼讃”

国立国会図書館

「日本の暦」

[http://www.ndl.go.jp/koyomi/kotoba/02\\_sekki.html](http://www.ndl.go.jp/koyomi/kotoba/02_sekki.html)

太陽高度(一日の変化)

<http://keisan.casio.jp/has10/SpecExec.cgi?id=system/2006/1185781259>

こよみの計算 - 国立天文台 天文情報センター暦計算室

<http://eco.mtk.nao.ac.jp/cgi-bin/koyomi/koyomix.cgi>